



平成29年9月1日(金)

藤 棚

第341号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

朝鮮物語

校長 小川義男

全員元気に新学期を迎えることができた。互いに、爽やかな、この再会を喜ぼう。

北朝鮮が「先軍」政治を唱えて暫く経つが、自ら軍事優先を唱えるのは、この国くらいのものかも知れない。軍は豊かな民に支えられて初めて、その存在を維持することができる。

大東亜戦争の末期、陸軍が、私の家にスコップを借りに来た。父は、「軍が民間の家にスコップを借りに来るようになってはお仕舞いだ。この戦争は負けだな」と語り、警察に聞こえたら大変だと、家族を慌てさせた。軍人の数が異常に増え、予算が軍のため優先されるのが先軍政治だが、先軍の本質が、いかなるものか、当時の軍国少年であった私は、良く知っている。

共産主義国家で、権力が三代にわたって世襲されるというのは異例だが、それだけに金一族は、クーデターを恐れているのである。ルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊し、裁判の名の下に、大統領夫妻が虐殺された。この事を、金一族は熟知している。この文脈で考えれば、北朝鮮問題は分かり易い。

韓国(南朝鮮)と日本の仲も、難しくなっている。昔、日本人が朝鮮人を虐待したというのである。朝鮮は日韓併合で、日本に組み入れられたのだが、その恨みが、しこりになっている。

私は、中学一年生の時、悪戯をしていて、当時希^{けう}有^{ゆう}だった、純白の背広の朝鮮人に、泥水を浴びせてしまった。「殺される」と思った。しかし、この方は、余程の人物だったのであろう。叱っただけで許してくれた。おそらく名のある方だったのであろう。今も、お名前を知りたいと思うが、分からない。

戦時の朝鮮人を、日本人が虐めたという。そんなことも、あったのかも知れない。しかし私は、偉大な朝鮮人しか知らない。北海道滝川町でサイさんという朝鮮人の友だちがいた。彼は、むしろ私を馬鹿にしていた。古物商のお父さんは金持ちであった。赤平市に、有名な雑貨店があり、奥さんは日本人だったが、みんな主である彼を尊敬していた。

戦争中、食糧難で、「石山」と言う山に畑を作り、ジャガイモを植えた。ここの地主が朝鮮人であった。「来年は貸さない」と言い、父と争いになった。頼み込む父の姿勢は、いささか卑屈であり、愉快ではなかった。しかし、父は少しく卑屈であったが、地主の朝鮮人の態度は、おお

らかで威厳があった。私は、そのような朝鮮人ばかりを見ていた。「朝鮮人は賢く金持ち」というのが私の印象であった。

米国、韓国が共同軍事演習を行うからミサイル開発を止められないというのは、少し違う。私が高校二年生の時に、北朝鮮は「国境を破って、突如軍事侵入した。ソビエトロシアのスターリンの命令である。それは今、電報の存在、その他で証明されている。突然の侵入だったから、韓国軍も国連軍も敗退し、釜山まで追い詰められた。日本海に追い落とされる寸前であった。

敗色濃い中で、マッカーサー国連軍司令官は、仁川に奇襲上陸した。形成が一転し、共産軍の敗北が確定的になったとき、今度は、革命間もない中国共産軍が、「義勇軍」として、大規模軍団で参戦した。人海戦術と言って、重機関銃の一斉射撃の前に、何千人が倒されようと、波のように進撃し続けた。まことに非人間的戦闘スタイルであった。

一説によると、革命直後、蒋介石は国府軍を率いて台湾に逃亡したが、その残党は莫大に大陸に残った。朝鮮に動員されたのは、そのメンバーだったとも伝えられる。

七年ほど前、38度線の南北休戦ラインを訪れ、休戦会談の建物にも入ったことがある。南北それぞれの兵士が、建物内の「休戦ライン」を守っていた。北の、感じの良い兵士と写真も撮った。学園祭に貼り出そうかしら。

38度線の、南側の山は青々している。北は、線を引いたように禿げ山だ。木材を燃料に使ったりしたためである。だから干ばつになるし、水害にもなる。こんな中で、先軍政治をやったら、大変な事になると思う。

今は38度線に近づくことも危険だ。

米韓軍事演習を、北の指導者は誹謗するが、このような歴史経過に照らして、北は、いつ一方的に攻め込んでくるか分からない。米韓軍事演習は、それに圧力をかけるためなのである。

中国、当時の清国は、朝鮮を支配しようとした。朝鮮半島全体が清国領になったとすれば、それがどれほど危険かは、生徒諸君にも理解できよう。それを防がんとして、日清戦争が起きたのである。日本が圧勝した。ついでロシアが、朝鮮を支配しようとした。若しそれに成功していれば、今の独立国日本も存在したかどうか。それが日露戦争だったのである。

日本海海戦で、ロシアの連合艦隊は全滅した。その日本側指揮官が、東郷平八郎であった。日本海海戦での日本の大勝を祝って、トルコのイスタンブールでは、提灯行列をやったという。提灯はどこで手に入れたのかな。それほどトルコ人は、ロシアを嫌い、日本鼻根だったのである。

少し脱線したが、米韓合同演習には、そのような歴史的沿革が存在するのである。北の指導者が、激しい態度で、軍事挑発を行うかのごとき素振りを見せようとも、所詮、アメリカのような大国と、韓国のような富裕国家相手である。赤貧国が戦争など起こせる筈がない。

しかし、一次大戦、二次大戦共に、起こる筈のないところで、大戦が起こった。何としても平和は守り抜かねばならぬ。

今は、一国が突出すべき時代ではない。日本は世界の人々と手を取り合い、可能ならば、北の貧しい人々をも助けて、国際親善を深めていきたいものである。

しかし甘くはない。中国は、我が領土、領海すれすれに爆撃機との編隊飛行を行い、我が国に対する軍事的恫喝を行っている。幼児の安全と女性の名誉を守ることは、若者と私のような老人の使命である。しっかり学び、しっかりした国家体制を築いていこう。学問はそのためにあるのだ。